
俺の見た世界 幻影帝国

ヴィルアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の見た世界 幻影帝国

【Nコード】

N5105B

【作者名】

ヴィルアス

【あらすじ】

俺、ヴィルアスって言うんだけどさ、村育ちの、狩り人だったんだ。……過去形なのが悲しい。現在俺は邪知暴虐な王を倒すため旅に出ている。……親父に無理やり付いて行かされたのだ。ああ、かわいそうな俺……。そんな俺の、物語。

第一話（前書き）

初めまして、今回が初作品のヴェルアスです。以後宜しく御願います。指摘などはどんどん御願います。注・すこし描写薄かもしれません。

第一話

プロローグ

俺は、村から旅立った。……親父に、無理やり連れられて。すべてが、そこから始まったんだろうな。目標は、村に無事戻ってくる。そして、平穩に暮らすこと。俺は、この村が好きなんだ。

そして、旅の目的は……？

それは、邪知暴虐な、王を倒すこと。

なあ、何で俺がそんなことをしないとイケないんだ？俺は平民だぜ？村育ちだぜ？この村は、王の暴挙の影響を受けてないんだぜ？なのに、何で俺が？

皆さんも、不思議に思うだろうが　それは、俺が一番知りたい。何故？

第一章

てな分けて、というかどういふ分けなのか知らないが、俺は今、親父に連れられて旅をしている。すこし、成り行きを話しておこう。まあ、暇だろうが、すこし聞いてくれや。

いつものように、俺は狩に行く準備をしていた。まあ、鬱憤を晴らすためだな。朝から、親父に物語を語られたからさ。俺の親父は、語り部なんだ。

で、どういふ物語を語られたかというところがまたこの国、幻影帝国の昔の話。実話。そのころは魔道帝国と呼ばれていた、という

言葉から始まり、国名が変わった理由、つまり戦争の話に突入し、今に至るといふ至極単純な話なのだが、これがまた戦争の理由にまで関わってきて、それが兄弟げんかもとい権力争いと言う陰険なところまで話が伸びるのですこしややこしかったりもする。ま、詳細を話すと、あ、逃げるな、これは序章だ、まだ本編も始まっているぞ。さて、それは、こんな物語だ。あらずじ？ 長男ウイリアムが王座についたのを許せなかった弟バロムが戦争を仕掛けただけさ。

「おい、たいへんだー！ やつらが攻めてきたらしいぞー」

町の門の見張りをしていた兵士が城の詰め所に入ってきて叫んだ。いったん呼吸を整えているところから察するに、急いで走ってきたようだ。バロム軍、要するに反乱軍が国王軍に攻めてきたらしい。

「兎に角いくぞ！ 敵兵の侵入だけは防ぐんだ！」

国王補佐のダクトがそう叫ぶと、全員がいつせいに休憩室を飛び出した。その後ろをなんと、女王様が追っている。

この女王、とてつもなく好奇心旺盛なのだ。その好奇心がどれだけ兵士を困らせるのか。現に一兵士が『何故着いてくるんですか！ 危険です』と言い、『構いません』と答えている。

兵士が目指すは町の門。敵兵の侵入は防がなければ。いや、遅かったか。もう敵兵は町に侵入してきていた。いそいで次の指示を出す。

「第一軍は敵兵排除とともに女王の護衛、第二軍はいそいで市民を避難させるんだ。おい！ 早くしろ、死にたいのか！」

その命令を受けて戸惑うグループが一つ。

「あれ？ 女王様はどこいったんだ？」

「おい、その奴！ 女王様をさがせー。お前達は民を市外に誘導す

るんだ！」

「おい、国王様が帰ってきたぞー」

このタイミングで帰ってきたのはまずいが、希望は見えてきた。国王は優れた魔術師なのだ。その国王が帰ってきたんだから相手の兵士くらい敵ではない。

現にあそこに光る稲妻と轟音。

兵士達が声を掛け合いやる気を出している中、その目の前に我らの国王が目の前に現われた。少々顔がやつれている。

「いくぞー！」

国王の姿を見た兵士達が一斉に駆け出した。

「まで。わしの言うことをよく聞け」

強い味方の登場で皆の士気が高まり、よし今から戦闘だというときだ。

「皆のもの、今すぐこの町から撤退するのだ」

兵士達が啞然とする。今日までこの都市を守り抜いてきた国王が撤退を宣言した。

それは敗北と同時に国王の弟、悪の化身と呼ばれることもあるバロムにこの国を譲ることを意味している。

兵士達を無視して国王の話が続く。

「今日、ここにバロムが自ら出向いてきた。ここはもう終わりだ。早く逃げろ！」

そう言い終わると王様は兵士達の非難の声が上がる。

「ウィリアム様！。何故ですか！ 今まで折角がんばってきたのに

！ 何故今更！ 死んだ兵士の犠牲を無駄にするんですか！」

国王は沈黙を守り、踵を返して走っていった。

「逃がしはせんぞ、ウィリアム」
走って逃げる国王の前で、声が響いた。国王が舌を打つ。渋々剣を抜き、戦いの火蓋は切って落とされた。

「グオオオオオオオオ」
夜。三日月がかすかに輝き、風が吹き荒れている。そんな風の音を打ち破り、低音の音が響き渡った。
黒い龍と赤い龍。大きな体を、巨大な翼を羽ばたかせ、上空で向かい合って殺し合いをしている。

その下ではなにやら人影が二つ。ローブを着て大剣を持つその姿はまさに子どもがあこがれる戦士そのものといったいいのではないだろうか。一人はその上に金色で、宝石などが散りばめられた王冠をかぶっている。国王だ。もう一人は真っ黒のローブが闇を打ち破るように見えている。バロムに違いない。

「私はまだ死ぬわけにはいかんのだ」
長い間にらみ合っていたが、その言葉を合図にウィリアムがすばやく剣を突き出した。その間にもう一人は呪文を唱え相手に火の矢を飛ばし、それを一度後退してから風で防ぐ。

どう見ても剣士程度でできることではない。魔術師の分野だろう。
金属と金属がぶつかり合い甲高い音を響かせる。また、互いが放った灼熱と雷がぶつかり合う光景は恐ろしくも綺麗である。火花が散り、青い雷が輝くその光は花火のようだ。
そんな光景に目もくれない二人のぶつかりあった剣が甲高い音を上げた。その上空では再び龍が火を吐く。

「エルファクト・ミサイル」

国王が叫んだ。空気を凝縮し、相手に飛ばす。

「プロテクト・デスフレイム」

そのミサイルをバロムが灼熱の炎が受け止める。火花がちり、再び魔術師達はにらみ合う形になった。

あたりは殺気に満ちている。

激しく吹いていた風が一瞬止んだ。その瞬間に国王が剣を振りかぶり相手に突進していく。龍を操るもの、ドラゴン・マイン드의戦いだ。

一度も王家が変わったことのないこの国の王家の信頼と力は絶大だった。しかし、この二人は戦争を始めてしまった。というわけで、いま王家の信頼はどん底まで落ちているといっても過言ではない。そんな状況でも国民が自分こそ王に、とならないのはひとえに王家の力のせいだ。王家というのは、ドラゴン・マイン드의血族だから反乱など、楽に抑えてしまう。だいたい、あまり税が重くないので平民の不満を買っているわけでもなく、それが平和につながっていたわけだ。

バロムが暗黒の魔法を放った。

「地獄の主よ。我を妨げんとするものに地獄の業火で罰せたまへ。

バルバロス・アバダ・スレイド・オブ・デスフレイム」

鳥のような形をした禁断の漆黒の炎が国王の方へ羽ばたいていく。

国王は瞬時に剣を前に突き出し叫ぶ。

「ギガフラッシュ」

光を放っていた剣先から閃光が放たれたように見えるが、発射されるところなど肉眼では見ることができなかった。その閃光が先ほどの炎に衝突する。必殺の一撃。

あの放たれた炎もけして弱いわけではないだろう。先ほど放たれた閃光が強すぎるのだ。炎をいともたやすく突き破りはるか上空に向

かう流れ星のように消えていった。

その光景を見てすぐさま、国王が追撃をしようと剣を振り上げる。しかし、先ほど破られた漆黒の炎は元の鳥の形を取り戻し、再び国王へ向かっていくのだ。いくら最強と呼ばれる国王でも油断して剣を振り上げた直後に相手の必殺技が飛んでくれば避けるしかあるまい。

「くそっ」

そう愚痴りながら国王右へ体をわずかに動かした。直進する炎を避けるのに十分な距離。振り上げた剣はそのままの状態だから炎が過ぎればすぐさま反撃できる。戦いなれしているとはこのような人間のことを指すのだろう。しかし、それは兩人に言えることだった。炎は通り過ぎ、バロムへ突進しようとしたその時、避けたはずの炎が方向を転換して再び王のほうへ向かってきて爆発音が響き渡り、灼熱は国王の体を包み込んだ。

その一点だけがあたりで赤く輝いている。そして、その炎は徐々に黒く染まり、王の体を蝕み、焼き尽くしていく。正確に言うところ、尽くしたわけではない。なぜなら、その魔法は呪いの魔法であり、すぐさま人を殺す呪文ではないからだ。徐々に相手の体を蝕み、死に至る。その速さは相手の力量によるのだが。だがそんな呪文でも両者の決着をつけるには十分だった。国王は地に倒れ込み、苦しみに悶絶する。バロムは嘲笑い、呪いをかけられた国王は力を振り絞って、呪文は長いものの空間移動の魔法を唱え始めた。呪文が長いというのはつまり、隙ができるということ。殺される確立が大いにある。しかし、

「お前も私の性格を分かっているようだな。力を失ったお前に興味はない。もう逃げても構わん。私の目標は国を奪うことだからな。もっとも、龍は殺させてもらおう。貴方の国は、私が改造してあげよう。ついでに、貴方の評判も下げておく。真実を流してな」
国王は何も言うことなく逃げた。

突然、龍が轟いた。怒りに身を任せている。発狂か。となると、それは国王に死が近づいていることを意味する。ドラゴン・マインドと龍は心でつながっているのだ。その片方でも欠ければ、もう片方には負担が来て、中には発狂する人もいる。

「残念だったな、兄貴」

もう一人の魔術師、バロムはそう呟き、邪悪な笑い声を響かせながら残った国王のドラゴンに魔法をかけて、すぐさま、国王のドラゴンは消滅した。

その頃、町は逃げる人たちであふれかえっていた。自分だけは助かろうと押し合い、倒れて泣き出す子どももまでいる。醜いものだ。

そのとき一人の市民が倒れている女性を見つけた。かなり衰弱している。無視しようか、とも考えたがこんな状態の町に女性が置き去りにされたら……善良なその市民は迷いの末その女性をはこんでやることにした。そして、二人はこの村に流れ着いた。先行きは暗かったのだがこの村にいきなりやってきた人達をこの村の善良な人々は受け入れてくれたのだ。

とまあ、こんな感じだ。なんで全部暗記しているかと言うと、何度も聞かされたからという理由で勘弁してもらおう。一週間に一回、それがまあ、五歳くらいから続いているから十一年間。馬鹿らしいだろ？

ちなみに、二人は結婚し、子どもを生んだ。それが俺だという残酷な真実はとことん俺を苦しめる。なんで俺はこんなところに生まれてしまったんだろうね。納得いかない。何故こんなやつが俺の父なのだ！ おっと、説明が飛んでしまった。この俺の目の前にいる“現在44十歳。体系は一般的。にもかかわらず年老いて見える。恐

らく、顔のせいだろう。老けて見える。五十歳くらいという感じだ。しかし、青色に輝く眼だけは生き生きしている”は父親なのだ。こんなのが俺の父親のわけがない。

っと、愚痴はこれくらいにするかね。読むのをやめるなよ。事態が急変するにはまだすこしある。

「よし、できた。母さん、行ってくるよ」

俺は母の写真に話しかけた。母はもう死んでいる。三歳くらいの子のことだからあまり覚えていないのだが。

美人だったということはこの写真から分かる。優しそうな感じだ。俺の性格、容貌ともに母から受け継いだのだろう。絶対にそうだ。そう思わないと生きてられない。

「親父、狩に行ってくるぜ」

「今、うちは葬式する金ないからな。死んでもしらないぞ」

子どもにこんな返事をするやつは血を受け継いだなど考えたくもない。そうだろう？

今日は十六歳の誕生日なのに……祝いの言葉一つもないなんて……。

いつもなら気持ちが高まる狩りも、今日はあまりやる気が出ない。憂鬱な気分が俺の頭を占拠している。それは……もうすぐ満月だからだろうな。満月の夜には必ず魔物が現れるというのがこの村の法則になっている。そしてこれがまた食料を奪っていくんだな。ま、この村は豊かなほうらしいから別にいいが。税もないし。他の都市

とかになると、徴収がすごいらしい、バロムめ。まあ、俺には関係ないけどな。

ところで、何でこの村はバロムの支配を受けていないかと言うところはまあ、田舎だからだろう。はつきり言って、国からは孤立しているようなものだ。それでもこの村が豊かであり続けているのは、この村自体に豊かな資源があるからだろう。隣にはこの山がそびえたっているし、ちょっと進めば湖だってある。川も流れているし。ま、だからこそ魔物が出てきてしまっただろうけどな。というわけで、結構幸せなほうなんだよ、俺たちは。たしかに俺はいまの人生に満足しているからな。唯一悲しいのは、親父の農場をすべて俺が管理していると言う点だけだ。ま、他の子供だってこんなもんだ。親も手伝ってくれてると思うけど。

なんて思っていたころもある。ああ、悲しい人生。

風が森にある木を駆け抜け、失踪する。俺に当たるその風は、冷たかった。

「うつつ。やっぱり朝は寒いな」

草が揺れ、触れ合う音がする。その草の間から、茶色い毛皮が現われた。猪だ！ けっこう大物だな。俺は草陰にかくれて、なれた手さばきで弓を引き絞った。猪のほうへの的を絞る。

風を切り裂く音をたてながら矢がまっすぐに飛んでいき、矢が猪の背中に当たって、猪が倒れる。

「やったっ！ 流石は俺！」

草むらを飛び出し猪を捕らえに行く。安心しきって。いや、普段なら油断はよくないけど、もう猪は死んだしな。

「って、うわっ」

猪が起き上がり、俺を睨んだ。

「しつこいな……」

すかさず腰の鞆から短剣を取り出し、猪のほうへ向けて構える。返り血を浴びるからあまりこれはしたくないんだが。向かってくる猪を短刀で……ってあれ？

猪が向かってこない。あれ？ どうしたんだろう。なんだか離れていくけど……。

ああ、そういうことね。くそっ！ 最悪だ。何でだと思っ？

後ろで息が聞こえる。狼みたいな鳴き声。俺の耳に、しつかりと聞こえてくる。というか、狼だよなこれ。

「グルルル……グオオオオオオオオオオ」

狼は集団で行動するからちよつと厄介だ。逃げるか……。ひとまず後ろを向いて狼の数を数えようとした。

しかし、狼はいなかった。

うおっ。前言撤回！ こいつはいつも村を襲っている魔物だ！ 今は一匹だから良かったものの、普段ならこいつらも集団行動だ。運が良かった……というべきなのか？ いつもなら狼には出会わないんだけど。すぐさま前へ走る。だがよく考えたら魔物に速さで勝てるわけがない。

この魔物が獣のような風貌をしているので余計にそう思える。

全体は立っている狼。口からはまるで食事が待ちきれない子どものように鋭い牙からよだれがたれている。おいおい、俺はおいしくないぜ！

村に出てきたときは魔物も皆と戦い、冷静に倒すんだけど……。

何故か今は恐怖しか感じない。俺って、一人のときは微塵も勇気が出ない性質なんだな。ま、別にいいけど。よし、逃げ切る！ それしかない。しかし

痛っ。

出鼻を挫くとはこのことだ。ついでに言うと、命も砕けそうだ。どうひいき目に見ても。

ダサいことに、躓いて転んでしまった。しかし、魔物はどんどん迫ってくる。ああ、俺の人生もここまでか。死という実感がわかない。それなのに、恐怖という感情だけが溢れてくる。死にたくない、死にたくない！ 体を起こすことができず、ずるずると体を引きずることしかできていない自分に腹が立つ。

頭の中で今までのことが走馬灯のように駆け抜けていくというのが本当だったんだ。信じてなかったんだけど。嫌なことばかり思い出させてくれるんだな、走馬灯は。エレンと喧嘩したこと、親父と喧嘩したこと、エレンと一緒に森に迷って帰れなくなったこと、親父にからかわれた事……今思えば、いい思い出だったな。なんて血迷ったことも死の直前には思ってしまうらしい。

そうだ、俺にはしなくてはならないことがあるんだ。ここで、死ぬわけにはいかない！ 最も、魔物一体に一人で勝てる技など持ち合わせていないのだが。ちよっとまで！ おい、こっちにくるな。おい！

魔物に襲われて危険だったらこう叫ぶんだ。

何故か頭に昔、親父に聞かされた言葉がよぎる。たしかそう教えてもらったことがある。

守りの呪文とか言ってたな。親父の言うこと思い出すなんて……いつもは気にしないのに……死が近づいている証拠だな。

まあいいや。今回のみ、信用することにしよう。助かるならどんなことをしようが関係ない！ 悪いことでも！ こう断言できるのが俺の良いところ……か？

このときの、この判断が間違っていたんだと思う。

覚悟を決めてゆっくりと、何度も聞かされた言葉を呟くくらいの大
きさで言った。

「龍よ。私の進む道を阻まんとするものを裁き、我に貴殿の加護を
あたえたまえ。ドラゴフレイ・スファイア」

その声は、あたりに木霊した。こんなに大きな声は出してないけど
？ そんな疑問を考える間もなく、不思議な現象が起こる。目の前
に青色の魔方陣のような紋章が現われ、俺の声を上回る、ドラゴン
が咆哮したような音が森に響き渡った。

今、俺は精一杯驚愕している。なんだ？ 俺は何をしたんだ？ 前
を見ると魔物が燃えている。もうこんがり。別に魔物だから食べ
ようとは思わないけどさ。

しかも、魔物の居た場所から半径2メートルは隕石で抉られたよう
にへこみ、焦げ跡がついている。……魔法か？ 親父が語っていた
物語、エルフやドワーフやフェアリーが出てくる物語に起こる物理
の法則を無視したような現象。目の前のこれは明らかにその現象だ。
本当に魔法なのか？ 俺が、魔法を使ったのか？ あの、ダクトと
同じように、魔法を使ったのか？ くそう、やっぱり親父は信用な
らないな。全然守りのまじないなんかじゃないじゃないか……。

ん、ん……。……起床時特有の爽快さを抱きながら声を上げて体を起
こして腕を伸ばし、辺りを見回す。そうして再び布団の中へ。非常
に間抜けなことだがそのまま数分が過ぎた。徐々に思考が戻って
くる。な、何？ ここは、あるうことが、俺のベッドの上だ。あれ？
なんでこんなところに？

それにしても、親父のやつ！ 何をどう考えたら子どもにあんなこ
とを教えるんだ！ というか、なんであんなことを知ってたんだ？

物語にしても、魔法にしても……もうちょっと普通の親を持ちたかった。謎にあふれる親っていうのはちよっと……。でも……命を救われたのはこれで2回目だ。

あの時は本当に危なかったな。初めて、村に来る魔物を退治する隊「クエスト」にはいったとき真っ先に飛び出して死にそうになった。そのときも起きたらちょうどこんな状態だったんだ。

そういえばここには誰が運んでくれたんだろう？前は親父だったんだから今回もそうだろうか？でもなんで見つけることができるんだ？だいたいなんであんな魔法知ってたんだ？たかが兵士の分際で。『全国の兵士の皆さん、ごめんなさい！こちらこそ狩人の分際です！』と頭の中で考えてみるのだが、今の兵士など国王に無理やり連れて行かれているわけなので別にどうでもいいか、馬鹿らしいという感覚に流され、本題に戻ることにする。親父が着たら今度こそ問い詰めてやる！死を覚悟して。

それにしてもものが渴いたなあ。

「痛っ」

お茶飲んでこようと思い、体に力を入れた瞬間である。俺の全身に激痛が走った。起き上がることもできないのか。はあ、今からでも親父をのしる言葉考えとかないとな。

お、親父が来た。部屋に入ってきてすぐさま言うのはお礼の言葉ではなく文句。

「おいっ！あれ、守りの呪文じゃなかったのか？今の俺の有様を見てみるよ！」

入ってきた瞬間に、いきなり脈絡不明なことを言われたのにもかかわらず、すかさず親父の反撃がくる。

「何？ちゃんとお前を守ってるじゃないか。助かるためならなんでもする、それがお前の考え方だろ？」

「え？ん、まあそうだけど……今の俺の有様をしてみるよ。こんなにはぼろぼろじゃないか！」

いきなりの罵声で少しは怯むかと思っていたのだが、俺の言葉に

続いて、本当に言葉通り、時間差無く反論する。

「何でもするのだからいいじゃないか。それとも、死にたかったのか？　せつかくひとが魔術師への道を切り開いてやったというのに」
そのとき、俺は見た。親父の明らかにしまったってというような顔を。早速聞いてみないと。俺の期待が高まる。魔術師への道？　正直言つて、あこがれる。

「今からでも死にたいのか？　そうだ、エレンはどうする？　お前以外のやつにあの純潔の天使を奪われてもいいのか？」

エレンとは……おい、プライバシーの侵害だぞ！　親父。

「デラーノ！　息子が瀕死なだけどさ、これをどう思う？」

本気でおこっしてしまうと思わず親を本名で呼んでしまうのが俺の悪いところだ。そんなに乱用するわけじゃないぜ。我慢できないときだけである。まあ珍しいわけでもないが。

「わしとしては息子としてお前のようなやつが生まれてきたことが不思議だがな」

馬鹿らしいような気もするが、俺はこんな親父のことでも尊敬してる。頭が狂っていることではなく、子どもをちゃんと救うことに対してだ。虐待やら何やらが溢れるこの世界では珍しいことだ。いや、これも虐待の一種なのか？　しかし頭が狂っているというのは困りものだ。

「魔法って、誰でもつかえるものじゃないだろ？」

「ああ、確かに。しかしある程度の素質があれば簡単な魔法なら習わずとも使える。難しい魔法になると構築式やらを理解しないといけないが。そうだ、あれほどの衝撃を受けるのは初めて魔法を使つたときと強力な魔法を使つたとき、それに中級以上の魔法の言霊を無視したときだけだ。次からは残りの体力さえ気をつければ安心して魔法を使えるぞ」

ちよつと待てよ。それって、俺に才能があるって事か？　凡人の子どもに魔法の才能？

「えつと、言霊って何？」

「言霊？ たとえば、あの魔法なら『精霊よ。私の進む道を阻まんとするものを裁き、我に龍の加護を与えたまへ』が言霊。『ドラゴフレイ・スフィア』が始動語。言霊は無視しても魔法は使えるがドラゴフレイ・スフィアの部分は普通は無視できないんじゃない。つまり、文章が言霊、単語が始動語じゃ」
えーと、どこでそんな情報を？

「そついえば、今日は祭りだぞ」

疑問を口にする前に親父が言った。おっと、今日はエレンと待ち合わせを……やばいっ！ 俺にとってエレンとの待ち合わせは大事、というよりも絶対だからである。これは最早、国王が国民に税をかけるのと同じくらい絶対である。ようするに理不尽かつ、無理難題ということだ。

「あ、そうか。エレンと待ち合わせしてたんだ。今何時？」

「午後6時」

なに？ じゃあ行かないと。やばい、エレンとの待ち合わせが！ 俺の儂い命の危険を感じ、急いで自分の部屋の机からなげなしの小遣いを手に取り家を出た。やばい……遅れたら面倒なことになる……。

この村の祭り、結構大規模なのだ。一年に一回くらい、という考えなのだろう。十六歳の俺でも楽しみにできるくらいなのだから。祭りは商店街一帯でやっている。商店街まではまだ遠い。それでもにぎやかな声などが聞こえてくる。もう始まっているのか。本格的にまずいな。遺言を書いてくるべきだったか？

「ふう」

やっとついた俺は息切れしている。普段ならどこかに座るところだが今日はそんな余裕はない。休む間を惜しみエレンを探す。えっと、エレンはどこにいるかな？ もう待ち合わせの時間から20分経っている。もしかして、もういない？

そんなことを考えているといきなり後ろから声をかけられた。

「誕生日、おめでとう！ はい、これプレゼント」

エレンの声だ。明るくて、楽しいな感じの声。

俺から見ればなかなかかわいい、少女。黒色の肩にまでかかっているきれいな髪。俺としては長くしたほうが似合うと思うんだが……。

いや、そんなことはどうでもいいんだけど。もう一つ、特徴的なのが輝く空色の瞳。これが印象的なのだ。その瞳はとても澄んでいて見つめられると思わずその世界に引き込まれてしまうような感じがする。それなのにペタンコの胸。それに加えてこの丸っこい童顔に俺の肩くらいまでしかない低い身長。それに真っ白な、白銀の肌。子どもかと疑いたくなるが俺と同じ年。

この少女、実は俺の親父と一緒に移住してきた奴の娘だ。まあそれはたいして関係ないが。しかし、それ故に我が家で唯一家族ぐるみの付き合いをしている家族だ。エレンも、俺と同じく母親を失っている。

それにしても、覚えてくれてたのか、誕生日。正直言ってほっとした。親父は祝ってくれなかったし、なにより、誕生日を覚えてくれているというのは恋人への大きな一歩……。妄想を振り払い素直に受け取る。

「あ、ありがとう」

我ながら情けない反応だとは思うが、これが精一杯だった。一度、エレンの顔を眺め、渡された物に視線を戻す。そうして、ときどきしながら渡された包み紙を開ける。

な、これは……。いや、これはないんじゃないか？

渡された包みを開けると現われたのは手作りのセーターだった。今は秋だから季節としてはあっている。問題は見た目だ。なれないことをしたせいかすごく粗末なセーター。形もよく見ればいがないでいるし、糸崩れも多い。極めつけはこの色。なんと、真っ赤なのだ。

これはもう笑撃としか言いようがない。俺のセンスを舐めてるのか！

そのセーターの真ん中にはなんと、クマが縫い付けられているのだ。嫌がらせいがいに目的があるのかと疑ってしまう。

しかし、エレンの顔を見てみるとまじめそうな顔をして、いや、頬を赤らめて指をもじもじさせながら俺の反応をうかがっている様子を見ていると怒鳴るわけにもいかなくなる。

こいつ、こんな一面もあつたのか。とりあえず、喜んだ振りをしな。いと。そういう日々の努力が大切なんだ。って、なんだか悲しくな。つてくるよな、男として……。

「ありがとう、気に入ったよ。今度着させてもらうな」

「そう？ よかったわ。色とか模様とか形とか、失敗したと思ったんだけど」

何？ 気づいてたのか？ おいおい、それならそうと……。

「それともうひとつ、もう一つ、それとセットで着るマフラーも作。つてるの。今度渡すからね」

新手のいじめのようだ。しかし、気に入らないのは本音だがうれしいのも本音である。思わず、笑みがこぼれた。エレンが、俺に誕生日プレゼント……ははははは。俺の未来は明るいな。

「ありがとう、楽しみにしてるよ」

心からその事実を喜んだ。

「ねえねえ、そういうえば、なんで遅れたの？ この恩はきちんと返してもらおうから」

さつきとは一変して、目をわずかに吊り上げ、リスのように頬を膨らませて問い詰めてくる。

かわいい……相手は怒っているのに何故か笑みがこぼれそうになる。いや、こぼれた。失礼極まりないことだが出てしまったものはしょうがない。

「ふふっ」

「な、何がおかしいのよっ！」

頬をより膨らませ、さらに赤くして怒る。いや、だからそれが原因なんだって。

「いや、笑ってない。断じて俺は笑ってないぞ」

笑みを必死にこらえながらも、笑い混じりの声でそういった。

「もっつ！ 今日の私の買い物全部あなたのおごりね。それで許してあげるわ」

「ええ？ 無理だつて」

エレンの分をおごり？ そんなに資金無いつて。この少女、結構大食いだったりするのだ。他人のおごりとなると、遠慮なく食べ、俺のこつこつとためた資金は湯水のごとく消えていく。

「怒るわよ」

断った俺に対して殺気とも言えるような気を発しながらそう言う。

普通は色気で勝負するんじゃないかな、そこは。しかも、エレンの怒り顔は、俺にとって魔物よりも危険な感じがする。いままでこうなって無事ですんだことはない。それだけに、俺は当然おびえているわけだ。

「今日はどんな罰にしようかな」

笑顔で言った、その一言が決め手となった。

「……分かったよ……」

「よろしい。じゃあ早速行きましょ！」

顔に満面の笑みを浮かべて元気に声を上げる。何がよろしい、だ。

そう思いながらもその姿を見て幸福感を覚えるのだが。それに質問に答えないでいいんだからいいか。この純粋な少女が魔物をひとり魔法で殺したなどと聞くと俺の事を皆に噂するだろう。そうなれば俺の親父にとっては好都合だ。魔法が使えるとなれば戦争中の国に兵として呼び出され、親父の抱いている未来像のままになってしまふ。魔法の存在そのものは公になっているものの、誰でも使えるわけではない魔法。そのうえ、戦争に悪用しているせいで評価も悪い。それなのに、戦争に主に攻撃用として便利で、魔術師となれば従軍必須。それだけは避けたい。

「あ、それで遅れた理由は？」

「……………」

ちよつとの間沈黙が続く。エレンがもう一度問う。

「……………」

うそをつくのは忍びないが……しょうがないな。

「狩りに行ってたんだよ」

俺のできる限りの演技で平然を装い、言った。完璧だ。俺なら役者にだってなれるかもな。と、自己満足していたのだが……。

「ふん。で？ 何で遅れたの？」

そんなことはどうでもいい、というような追求する目つきが帰ってくる。先ほどより、一段視線は厳しくなってしまったようだ。

「いや、だから狩りに行」

「怒るわよ」

反射的に、びくつと身構える俺。今までの数々の場面が頭をよぎった。

「何故分かる？」

「女の勘」

女とは恐ろしい生き物だな。

「……………」わかったよ。誰にも言わないって、約束するか？」

もつとも、この少女の口はいとも簡単に開く。でも俺はエレンの期待を裏切るようなまねはできない。いや、さっきはうそをついたわけだが……俺の考えは臨機応変に変更できるのだ。

俺がそう考えているとも知らず、エレンは気軽にこたえる。

「もちろん！ まかせておいて、絶対に言わないから」

「じゃあ、悪いけど今度、俺の狩りについてきてくれるか？ 面白い

ものが見れるから」

「ま、今は祭りを楽しまないと」

俺が魔法使ったなんて知れたら……そうなるとこの村からお別れか。魔術師は偉大だと思ってるぜ。一時的に偉大な魔術師、ダクトにあこがれた事もある。ダクトの人を自分の命をかけて守り抜いたその精神と実力は表彰に値する。

でも、なるのはちょっとな……。

「あ、いか焼き！ 早速食べようかな。さあ、行こうっ！」
……考えるのは後にしよう。

店にはもうすごい行列ができていた。恐らく、村中の人がこの祭りに参加している。

エレンが悲しそうに最後尾に並んでいた。長蛇の列とはこのことだろう。エレンは待ちきれなくなり

「他の店に行こうかな」

と言うがどこも一緒。溜め息をつき観念して長い列に並ぶ。

「少しは待つことも覚えたほうがいいぜ」

親切心でそう言うのだが。笑いながら言ったのがまずかったのだろうか。エレンは

「今日は貴方のおごりなのよ、あまり私を怒らせないようにね」

と笑って返す。俺は苦笑したが内心では喜んでいる。こつも並んでいるのはあまり多くの店を回ることではできないだろう……そんな期待は打ち破られたのだが。こんなときに限って雨が降ってきた。多くの客は雨宿りにどこかへ去っていく。さっきまで存在していた列はほとんど消えてしまった。エレンに

「帰るか？」

と無駄と分かっているながらも聞いてみる。当然帰ってきたのは……。

「何で帰るの？ 人が減っていいじゃない。今がチャンスよ。さあ、いきましよう！」

「俺、傘もってないけど？」

「ふふふ」

そう笑ってエレンのかばんから取り出されたのは折り畳み傘だった。一個の。いつもの笑顔で

「いれてほしい？」

と聞く。暗くてよく見えないが赤面していることが分かる。これは断るわけにはいかないな。

「入れてくれよ」

「しょうがない！」
わざとらしくそう言って、
「ヴィルアスが持ってね」
と付け加える。

世間では一般にこういうのは相合傘と呼ばれるのではないか？ 恋人同士の象徴の。しかも、折り畳み傘。当然狭い。だから、二人でくっついていてるわけである。エレンのぬくもりが俺にまで伝わってくるというのも仕方がないじゃないか！ 俺の心音ももしかしたら聞こえているかもしれない。こんなに音を響かせているのだから。こんな状況はうれしいのだが、ここまで来るとかえってしゃべりづらい。

一応エレンの表情も確かめてみる。普段と同じように見えるが……エレンの顔を眺めていると目が合った。気まづくなくなって眼をそむける。こんなことの繰り返し。いつも友達のようにエレンと接してきたのだが。こんなことは起こらなかったぞ？ 気まずい沈黙だ。なんとか打ち破らねば。
ちようどいいところにいか焼きの順番が回ってきた。

「四人前ね」
心配は無用だったか……エレンの笑顔で言った一言が沈黙を破った。いつもこの役はエレンなのだ。ありがたいことだが俺はそう言うのは苦手だ。

「ええええええええええ！ 四人前？ 取り消せ」
これがいつもの流れ。そしてこの後は決まってエレンの笑顔の「だめ」

で終わる。さつき沈黙が流れた分ありがたかったりもする。それにしても……。

「待てよ、おい、待ってくれー」

一時間半後。俺は精一杯叫んでいた。それを無視してエレンは次々と俺に金を要求する。一回目のいか焼きなんか一気に四人前買ったんだ。食欲とは恐ろしいものだ実感した瞬間だった。二回目の焼きソバは二人前。フランクフルト二個に焼き鳥三本。信じられない出来事だ。怪奇現象だ。

ちなみに、ここであげたのは食べ物だけだ。実際にはジュース、ビンゴゲーム、射的、輪投げ、金魚すくい。これだけを一時半間でクリアしたのだから、もう俺の体力は極限まで消費している。そのうえ、やっとエレンが止まったからベンチにすわるとこんどは元気な笑顔でこういった。

「あとほくじ引きをして……他はその後決めましょ」

今のうちにくじ引きもするだど？ や、やめてくれー！ というか、他って何だ。ああ、もう無理だ……そのままベンチに座り続ける。前を行っていたエレンが近寄ってきた。

「だらしないね、ヴィルアスは」

「ちよつと、待て……少し、休ませろ……」

もうすでに俺は重傷者となんら変わらない状態になっていた。精神的には。

そんな俺を見て流石に不憫に思ったのか、エレンは無言で俺の横に座った。雨はまだ降っているので傘は差したまま。その傘の小さな範囲にエレンはうまく入ってきて俺のすぐ横にくっついて座る。

その次に俺の肩に頭をのせて腰に手を回された。このときの俺の心音は恐らく最高潮に達していたと思う。

果たして、本当に時間は経っているのか？ そう本気で思えるくらい周りから何も入ってこない。雨の音も。ただ、エレンという温もりだけが俺を覆っている。ふと、時計を見ると時間はすでに八時三十分になっていた。時が過ぎるのはこうも早いのか。あたりを見回すと、雨が弱まり人が再び列を成していた。エレンのほうに顔を映

す。

寝ている……その寝顔を満足いくまで眺めていた。三十分くらいか。恐らく、変態扱いを受けるだろう。だが今、こうしていられることだけで幸せだった。こんなことを思ったのは初めてだ。恐らく、この村を出なければならぬかもしれない、という不安のおかげだろう。まあ俺が勝手にそんな想像しているだけかもしれないけど何か実際にそうなってしまうような気がしてならない。はあ、何としてもこの村に残らないと。兵士なんて物騒な仕事は嫌だ。

そんなことを考えながら無意識のうちに俺はエレンの頭をなでていた。もう本当に自殺的行為だ。寝むれる獅子を撫でるよな物だ。

「うにゅ〜」

はっ。起きた？ あせって顔を見るが、しっかりと寝ていた。寝言か。

「あとフランクフルトもう三本〜」

……言うべき言葉が見つからない。そうかそうか、そんなに食べたか、俺の金をこれでもかというほどに使わせたくせにまだ食べたらないのか……ふざけるなっ！ 立ち上がった。傘は俺が持っていたわけだから当然エレンは今、雨を直に受けているわけである。その冷たさを感じたのかエレンは

「あゝ、よく寝た」

と一言いって目覚めた。そして次に

「ここどこ？」

真顔で言った。寝ぼけている。

「何言ってるんだよ。まだ祭りの途中だろ？」

その一言でいままで虚ろだったエレンの眼がぱちつと大きく開いた。俺の返答はまちがいだっただようだな。エレンは起きていきなり言う。

「そうだった。フランクフルト買わないと！」

その言葉に、皮肉を言ってみる。墓穴を掘ったな、エレンめ！

「夢で食べたのにまだいるのか？」

エレンは恥ずかしそうに訊ねる。

「ね、寝言言ってた？」

時々見せるエレンの赤面した顔が、再び表れた。

「ああ、おいしそうに言ってた。しかもフランクフルトもう三本
つて」

「き、聞いてたのね！ もうっ！」

その表情は、すでに恥じらいより怒りを多く含んでいた。な、何故俺が怒られる。理不尽だ、理不尽すぎる。

「で、まだ食べるのか？」

「ん、もういい。眠い。帰って寝る」

「……そうか、じゃあ行くぞ」

「ヴィルアス……」

「ん？」

思わず、緊張してしまう。恥じらいながら立ち上がっている俺を座ったまま見上げられてるんだぜ？ そして一言。

「おんぶして」

怒って言われているわけでもなかったが、その言葉は俺を説得するのに十分な効力を持っていた。

「はいはい、分かりましたよ」

疲れているのにしょうがなくエレンをおんぶしている俺の背中ではエレンがぐっすりと眠っている。意地悪なことにわざと揺らしてみるということも何度か試みたが全く起きない。

エレンを背負いながらとぼとぼと歩いていく。はあ、俺も疲れてるのに。やっこのことのでついたのに本人はぐっすり。流石に頭にくる普通に起こすんじゃ面白くないよな、などと考えてしまうのも仕方がない。人として当然の成り行きだ。

どうやって起こそうか？ そんなことで四苦八苦する。迷った拳句、普段できないことをすることにした。不純な想像をするんじゃない

ぞ。

まず、エレンをベンチに下ろした。すやすやと寝ている。起こすのは嫌だがこうするしかないんだ。ごめんよ、エレン。そう思いながらもたたんだ傘で、今までの怨みもこめて頭をたたいた。いつもなら避けられるか受けられるか止められるか、いずれにしる当てることはできない。

鈍い音がする。その音の直後に

「いたっ」

と奇声を上げて頭をなでながら頭上を見上げるエレン。殴ったのが俺だと知って

「何するのよっ」

と文句を言う。

「だってお前、起きないじゃないか」

そう、その通りだ。こうでもしなければ起きない。それでも納得できずに

「だからって殴ることないじゃない」

という。まずい、このままではこの会話に終わりは来ない。早く家に帰りたいという思いに突き動かされ、答えを出す。つまり、『しようがない、この件は無視で』といった具合だ。

「明日の午後三時に町の広場だな。軽装で」

そっくり残して去る。許してくれ、エレン。

「無視しないでー!」

と声を上げているが反応するつもりはない。家へ一直線。

やっとついた我が家。ものすごい一日だった。親父は居ない。腹も減っていないし、風呂に入る余裕もないのでベッドに直行。すぐさま俺は深い眠りについた。

朝。いや、昼というべきか。起きたのは正午だった。待ち合わせを遅くしていてよかった。そう思いながら早速風呂に向かう。風呂から上がった感想を一言。

「はあ、さつぱりした」

昨日のことを思い出すと頭が痛くなる。よくもまあ、あんな目まぐるしい一日を過ごせたものだ。昨日よく食べたせいかあまり腹は減ってない。しかし、家のテーブルには昼食と置き手紙があった。なになに、『しばらく留守にする。昼食は置いてある。夜には帰る。どこへでも好きに行け。尊敬に値する父より』と書かれていた。最後の一文はいただけながとりあえず昼食は食べておくことにする。そして、何を考えるわけでもなくすごしているうちに待ち合わせの時間が来た。

少しの金と弓、短刀を持ち、村の商店街の方に歩く。

商店街の中心には待ち合わせておいたエレンとその父親がいた。

何故こんな親からあんなに可愛い少女が生まれてくるんだろう。共通点は黒髪だけ。あとは似ても似つかない風貌である。エレンの少々童顔とはいえあの可憐な顔立ちに比べてごつごつした顔。エレンの空色の澄んだ瞳に対して茶色の鋭い眼。細い白色の体に比べて黒い、筋肉に覆われた体。

「おお、ヴィルアス。今日も狩に行くんだろ？ 大変だな。がんば

れよ。それとエレンをよろしくな」

「ああ。獲物しとめとかないと。巨大な猪を捕ってきてやるよ」

「ほう、がんばれ。まあ、無理だろうな」

「ねえねえ、何を見せてくれるの？」

さつきからこの質問ばかりされる。この山に入ってからのことなので一時間くらいか。

「あまり奥にはいけないけど獲物がいないとおもしろいものは見せないんだ。ちょっと待っていてくれよ」

エレンは納得できない、と顔で訴えかけてくるが今回は無視している。今からでもエレンのびっくりする顔が楽しみだ。しかし、正直って魔法を調節できるかどうか不安だったけどな。また倒れてし

まっただらどうしよう。

「グルルルル……グオオオオオオオオオオ」

ん？ 突如、なんだかあんまりいい思い出のない鳴き声がする。これはこれは……まずいな。

「おい、エレン一回村に戻ろう！」

「え？ なんで？」

疑問を感じながらも俺の言うことに耳を傾ける。

振り向いて自分達が来た道に戻ろうとして……あつ。やっぱり？

いやな予感がしてたんだ。俺がこの間倒した魔物は俺達の後ろ、つまり……村への道のほうに陣取っている！ くそつ。注意が足りなかった。森で魔物に出会ったのは昨日が初めてだったし、いつも村に魔物が出てくるのは夜だけだし、大丈夫かと思っていたんだけど。ざつと三十匹はいるだろう。

「おい、エレン。しょうがないから山の奥に逃げろ」

いつも俺の言うことに耳を傾けてくれるエレン。だが今回は足が震えていて言葉も耳に届いていない。しょうがないな。この手はつかいたくないんだが。

逃げるが勝ち！

はあ、はあ、はあ、はあ。やはり今回も追いつかれている。しかない、か。

「ドラゴフレイ・スファイア」

再びあのときのような轟音が。この音はさすがにエレンにも聞こえたようだ。そこでエレンは衝撃の事実に気づく。さっきの魔物の十匹くらいが死んでいる。それがあたりの荒れ果てた光景と同調してなんとも不気味な雰囲気を出していて、しかも残りの魔物もびつくりして足が動いていない。俺が見たら失神するような光景だ。

だがエレンはもうひとつの重大な真実に衝撃を受けていた。それは……今、エレンは俺に抱きかかえられているってことだ。俗に言う

お姫様だっこ、といった感じである。エレンは顔を真っ赤にしている。

しかし、自分では歩けないことが分かっているので身をゆだねている。エレンの心音が俺にまで聞こえてくる。とうとうエレンは、手を顔にかぶせ、顔を隠してしまった。俺だつて恥ずかしいんだぜ？
ちなみにこれが俺の使いたくなかった作戦だ。でも……このままでもいいかな。

おっ、魔物に追われているって事を忘れていた。だが、そろそろいかもしれない。だいぶ差が開いている。もう追いつくことはできないだろう。それにしてもずいぶん奥まで来たな。もどるのにはずいぶんと時間がかかる。それに下手に下りると魔物に出くわす。やばいな、もう夕方だ。このまま村に下りると危険なのに……どうするべきか。

お、洞窟があった。

「エレン、とりあえずあの洞窟に入ろうぜ」
先に俺が行くとあとからとぼとぼとついてきた。

エレンはかなり心配している。ちよつと暗い洞窟に二人きり。自分の身が心配なのか？ おいおい、もうちよつと信用してくれてもいいじゃないか。

そんなことを考えているとエレンが話しかけてきた。

「あの、さっきはありがとう……」

うっ。柄にもなく緊張している。はにかみながら、俺を見つめて……
もしかしてこれはっ！ 衝撃の告白！？ そして、エレンが小さく口を開いて 地面を蹴る音が洞窟に響いた。

「グルルルル……」

え？まさか、最悪の展開つてやつか？ こんなときに。よくあるパターンだが納得できないな。よりによってこんなときに。エレンの顔も真っ青だ。仕方がない。

「ドラゴフレイ・スフィア」

龍がほえるような音。いや、龍の咆哮を聞いたことがあるわけじゃ

ないけど。

いつの間にか覚悟を決めてしまっていた俺は、始めてこの魔法の姿を目にした。

灼熱。

まず前に突き出した手の前に緑色に輝いた魔方陣が現われる。そこから光線状の炎が龍の咆哮のような音をたてて発射された。

魔物に当たった瞬間に周りを巻き込んで小さな爆発を起こす。酷い。生き物が燃える様を俺は見た。途中まで。残りは魔法を使った衝動で見れなかった。

うわっ。死にそうだ。俺はいきなり精神と身体に起こった疲労に耐え切れずに仰向けにたおれる。くそっ、こんなにきついとは。こんな大変なことしたんだ。せめて魔物だけは。

閉じていくまぶたに泣き叫ぶエレンが見える。俺のために泣き叫ぶエレン。それ以外は音が聞こえない。要するに、魔物の鳴き声は聞こえないのだ。殺したか？

「グルルルル」

なっ。生きていたのか。エレンの悲鳴が聞こえた。そして あれ、なんか向こうに人が二人いるように見えるな……。閉じていく瞼の向こうには、たしかに人が二人いた。

第二話

「よかった、気がついたのね！ もう、死んだかと思った……もう迷惑かけないからね。ぐすっ」

それが最初に聞いた声だった。エレンだな。おいおい、泣いてるのか？ 珍しいこともあるものだな。いや、今はエレンが俺に抱きついて泣いていることを素直に喜ぼう。

いい気になっているところでもうひとつの声。

「よかった、気がついたんですね。なかなか危機的な状況でしたから」

知らない声だ。おれはその人のほうを見た。見た目は二十歳くらい。性別は男だな。長い髪の毛のせいで一見分からない。ローブを羽織っていて大きな剣を背負っているが、下には鎖帷子を着込んでいる。髪は青色だ。目はきりつとしていて男前。身長は百七十センチ前後。どう表現すればいいかは分からないがなんだか威厳がある。

それに俺並にかっこいいんじゃないか？ ちなみに俺はなかなかかっこいいほうと自負している。それでも自分が負け惜しみをしているように感じるな。相手が悪かったか！

「ここはどこだ？」

そう、俺は森の洞窟で殺されたはずだった。それがテントの中に居るなんておかしい。

「さっきの洞窟を下ったところ、森の真ん中くらいです。魔法で出た炎を見て駆けつけたんですよ。危なかったですね。私がもうちょっと来るのが遅かったら死んでいたと思いますよ」

「ヴィルアス……この人、龍に乗ってきて……龍が火を吐いて……魔物を殺して……」

エレンの声が震えている。龍に乗って……ドラゴン・マインドなのか？

その男が言う。

「あれは攻撃の魔法、ドラゴフレイ・スフィアですね？ 最初あれを見たときダクト様が使ったと思ったのですが。誰に教えてもらったのですか？」

俺は失礼を承知で聞いた。

「それよりお前は誰だ？」

「ああ、私はメディアアスと言います。もうお分かりかと思いますがドラゴン・マインドです」

ドラゴン・マインド！ やっぱりか。昔までならあこがれたところだが生憎いまは憎さしか感じない。どうせ国王の兵士だろ。敬語を使ったほうがいいのか？ まあ、いいか。

「俺はヴィルアスっていうんだ。よろしく」

「私はエレンって言うの。よろしく」

一通り自己紹介が終わり、メディアアスがまた訊ねた。

「あの魔法は誰に教えてもらったのですか？」

っ！ しまった。俺が魔法を使えるってばれてる！ まずいな……。このままじゃ俺は国王の兵士に……。

「誰に教えてもらったんですか？」

「教えてくれたのは俺の父だけだ」

「教えてくれたのは君の父なんだね。その父の所へつれていってくれないか？」

「俺の親父は何も教えてくれないぜ」

「いや、いいです。おそらく知り合いですよ」

俺の親父って、そんな有名人だったのか？ この機会に親父が全部話してくれたらな。

俺は今、見知らぬ男と家に向かって歩いてる。なんでこんなやつと。

でもドラゴン・マインドに逆らうことはできない。エレンは一足先に自分の家に帰った。かわいそうに。怒られるだろうな。昼間に出かけて帰ってきたのが夜中。

これが十六歳の少女のすることか？

エレンの言い訳しだいでは俺にも魔の手が……おいおい、そんなこと親父にばれたらやばいんじゃないか？

一年中、いや一生からかわれることになるぞ？ 前にもこんなことがあった。

十二歳の時、俺が森にはいつて出られなくなったんだ。そのときの夕方にエレンが火を焚いて森に入ってきて俺を探してくれた。

そして自分が迷子になり、その泣き声を頼りにエレンを探し、夜になってから一緒に森をでた。そのときですら散々村の人々に騒がれた。ちなみにそのからかう人々のリーダーは……俺の親父だ！ 今は十六歳だぜ？

「君ほどの程度魔法が使えるんだ？」

「俺はあの魔法以外は教えてもらってません。あの魔法だって守りの呪文って言われてました」

メディアスは明らかにがっかりしている。やはり、俺を国王の兵士にするつもりだったのか！

「そうか……君の父の名前は？」

「え？ デラーノですが」

その答えを聞くとメディアスは少し考え出した。

「やはり人違いか？」

独り言のようにつぶやく。俺も親父のことについて考えていた。お、ついた。しかし何でこんなボロ家にこんな偉い人がくるんだ？ やはり親父は偉いのか？

「お、いい、親父！ 客だぜ」

部屋はその呼びかけに答えず、沈黙をまもっている。親父がこんな時間に出かけるなんて。珍しいな。

「親父はいないみたいだな」

メディアスはちょっと困った顔をしながらいった

「すみませんが、私が呪文を唱え終わったら目をつぶってください」

そういうとメディアスはいきなり呪文をつぶやき始めた。床に青白い魔方陣が浮かび上がる。魔法のことはあまり詳しくないが、とうより存在しか知らないがかなり単純な魔法のようだ。そのとき、メディアスの言葉が止んだ。俺は咄嗟に目を瞑る。次の瞬間。

扉が開き親父が家の中へ駆け込んできた。その親父の顔を見てメディアスが喜びながら話しかける。

「ダクト様ですか？」

「は？ ダクト様？ 誰のことだよ。様付け？ 話が分からなくなってきた。親父は驚きを隠せないでいるが明らかにその顔の中に喜びが混ざっている。」

「メディアスか！ 何故こんなところに？ ウィリアムと一緒にじゃなかったのか？」

メディアスの顔が急に暗くなった。つて元国王？ なんてそんなお偉いさんが？

「それが……父はバロムにかけられた呪いがまだ解けないのです。その呪いはバロムが死ななければ消えません。貴方が何故隠居しているかもしっています。引退したのも知っています。しかし、どうかもう一度偉大な魔術師として王様のために、我が父のために働いてくれませんか？」

こいつ！ 王家の血を引くものは全員ドラゴン・マイン드의素質を持ってしていると聞いたことはあるけど……まさか王子だったとはな。敬語を使ったほうが良かったか？ ま、本人も気にしてないみたいだし。

ん？ いまさらになってもうひとつの事実が徐々に俺の頭を侵食していく。

親父が、このくそ親父が偉大な魔術師、ダクトだと？ ありえないって。こんな人間性最悪のこの親父が、英雄？

しかし、ありえない事実のおかげで疑問がどんどん解消されていく。親父が魔法を知っていたのも、城の兵の会話を知っていたのも。何

でだ。何で……。

ついでに言つと読心術ができるのも。魔法でならできるだろう。最悪だ。ここまで来ると反論の使用がない。俺は親父の手によって未来が変えられてしまうのか。俺は、村の狩人で十分なんだって！重い空気の中、ようやく親父が口を開いた。

「そうか、王が……で、この老いばれにバロムを仕留めると。王の命はあとのくらいなんじゃ？」

「それが……あと一ヶ月くらいだと言っていました。」

おいおい、これ以上空気を重くするのはやめてくれよ！ こういうのは苦手なんだって。

「ふう、しょうがないな。もう一度バロム討伐を試みるか。今回はもう一人いるぞ。メディアス、このわしの倅も連れて行きたいのだからいいか？」

来たー！。俺はこの発言を恐れていたんだ。くそつ。今ほど親父を恨んだことがあっただろうか？

「おい、親父！ 俺を巻き込むなよ！ ふざけるな！」

思いっきり怒鳴って家を出ていく。冷え込む夜の風を受けながら、数秒間立ち止まった。その間にメディアスはあわてて俺を追いかけようと外に出てくる。

「メディアス、止めなくていい。そのうち帰ってくるからな。旅の日程でも相談しておこうじゃないか」

その言葉を聞いた俺は分けがわからずがむしやらに走っていった。

気がつく公園についていた。まだ頭が混乱している。うつつ、寒いな。その寒さが俺の頭を少し冷やしてくれた。ようやく精神だけは落ち着き、ベンチに座り込む。おっ、星が見えるな……おっと、何故かしみじみとしてしまった。まだ抵抗する術はあるはずだ。そ

れを考えないと。

大きく溜め息をつき、あたりの光景を楽しむ。あ、あの木、葉が一枚しかついてない。あの星はきれいだなあ。あの店の菓子パン、おいしいよなあ。そういえばあの家、エレンの家じゃないか。そんな、どうでもいいことでも、町を離れる今となっては目に焼き付けておきたい光景だった。って、また弱気になってるな俺は。はあ、エレンにも会えなくなるんだよなあ。

「あれ？ ヴィルアスじゃない。どうしたの？ こんなところで」「うおっ」

エレンじゃないか！

「どうしたのよ、変な声上げて」

「変な声って、夜にいきなり背後から名前呼ばれたらびっくりするだろ」

エレンは、ふふつと笑って

「ちよつとは元気でみたいね。さつきから暗い顔してたから。どうしたのよ、私に話してみなさい！」

……ありがとう、エレン。いつもこうやって俺を元気づけてくれるんだ。ささやかながらも。この気持ちを伝えたことはないが、いつか、きつと。笑うエレンの顔を見て俺も思わず笑みをこぼした。

「ねえねえ、なんでヴィルアスはここにいるの？」

エレンが俺の隣に座って聞く。

「お前こそ、どうして夜の公園に一人でいるんだよ。あ、門限破ったから家にいれてもらえなかったのか。お前、もしかして……俺のこと言い訳に使わなかったよな？」

「使っていないわよ、そこまで馬鹿じゃないんだから。あのときの悲劇は私だっけ覚えてるもん」

……恥ずかしくなってきた。それは、エレンも同じらしいが。

「で、何でここにいるの？」

「それがな……」

俺は一部始終をエレンに話した。少しは寂しがってくれるかな、と

期待しながら。別れのときのことを考え、ちよつとニヤつきながら。
「そう、よかったじゃない。あこがれてたんでしょ、魔術師」
返ってきた言葉は、俺の想像とは違うものだった。あっさりとして
いて、何も感じないような、適当な答え。そして、信じられず、返
した言葉がこれだった。

「え？」

その言葉から数秒間、俺たちは夜の公園の中で見つめあっていた。
風が吹き、落ち葉が宙を舞う。その風に押されて、木についていた
最後の葉がついに落ちた。それを見たエレンはさっと座っていたベ
ンチから立ち、顔を手で押さえてどこかへ走り去っていった。

俺は頭を鈍器で殴られたようなショックを受けた。少しは心配して
くれてもいいじゃないか！ 薄情者！

俺はしばらくベンチに寝転がっていた。

第三話（前書き）

ありがとうございます

第三話

気がつくともう日が昇っている。寝ていたみたいだ。昨日のことも全部夢だったらしいのに。そう考えてしまった。何故か俺の思考はマイナス方面へばかり行くらしい。駄目だ駄目だ。まだ、手はあるはずだ。この村を離れないために……そういえば、何で俺は村に残らないとって考えてんだ？ 今更だが、よく分からない。何でだろう。やっぱり、この村が好きだからかな………あ、そうか。国の魔術師になりたくないんだ。あ、そうかそうか。なるほどね。お、それと平和がいいからだな。ああ、そうかそうか。これで村に残ると言う決心はついたな。あとは手段だが………逃げるか？ って、無理だよなあ。じゃあ……。

「おい、ヴィルアス！ 嘆いてないで出発の手伝いしろよ」

いきなり話しかけられてびっくりした。話しかけてきたのは親父。原因つくった本人のくせに。何を言っているんだ。意地でもいかないからな。そう思って俺は沈黙を守った。そうしていると親父が不適な笑みを浮かべて言い出した。

「おや？ エレンにも薦められたのではなかったか？」

「え？ な、なんで知ってんだよ。自分の子ども見張ってて面白いか？」

このくそ親父め！ しかし意外な言葉が返ってきた。

「馬鹿め。エレンに聞いたんだ。しかし……それも面白いかもな。見張りか……」

え、エレンに聞いた？ 何であいつが話すんだよ。余計なことしやがって。

「いつ聞いたんだ？」

「昨日の夜、いきなりエレンが家に来てな。涙目で本当かどうか聞いてきた。よかったじゃないか。心配してたぞ」

「じゃあ尚更行けないよ」

親父はまたしても不適な笑みを浮かべている。

「じゃあ行く気になることを言っておくがこれは真実だぞ」

「ああ、一応聞いてやるよ」

「この村に一ヶ月に一度、満月の日に魔物が来るじゃろ？ 食料やらを奪いに」

「ん？ ああ」

まあ、退治できる時もあるし、この村は豊かだから被害だってすくないけど。

「その魔物はバロムが送っているんじゃないよ」

「な、何？ バロムって、現国王なの？」

「それを面白がってるんじゃないよ」

「う、うそだろ？ そ、それだけのために……ふざけるな！」

しかし、噂というのは田舎にも届くもので、俺だってバロムの悪評は知っていた。

「どうだ？ 行く気になったか？」

「え、ま、まだだっ！」

「じゃあもう一つ」

「ん？」

「お前の母親を殺したのはそのバロムが送った魔物じゃ」

……え？

「今なんて言った？」

声が、疑問というよりは、呑み込めないというような声であることに、俺も気づいてしまった。

「お前の母を殺したのは実質バロムじゃ」

いやいやいや、嘘だよな？ うん、嘘だ。そうに決まってる。そんなわけが、あるはずない。親父の頭がおかしいだけだ。

「わしの頭はおかしくないぞ？」

俺の心を読んだかのような言動。まちがいない、読んでいるんだ。流石は魔術師。あー、何であっさりと肯定するんだよ！ 嘘つきやる

うめ！ そんなことがあつてたまるか！

「残念ながら本当のことじゃ。だからバロムを倒しに行こうとして
いるんじゃないよ。腐った王をな」

何故か、こうして言いくるめられてしまう俺って……。

「しょうがないな。ついていってやるよ。ただし、二つ条件がある。
一つ目は、俺を城の兵にはしない。二つ目は、俺に魔法を教える
こと」

「散々魔法嫌つておいてやはり覚えたいのか。さては……エレンに
自慢したいんだな？」

うつつ。またしても凶星。親父に心を読まれるというのはずいぶん
と不便だ。

「で、条件呑むのか？」

「ああ、呑んでやるよ」

そういえば……なんで俺を連れて行くんだ？ 兵士にならないつて
約束したら連れて行く意味ないじゃないか。もしかして魔術師にな
らないつて約束はしてないとか言い訳するのか？

「条件追加。俺は王のために働かない。これでもいいか？」

「ああ、いいだろう」

えっ。親父があっさり呑んだ。親父の悔しそうな顔が見れるかと思
つてたのに。

俺も読心術できたら親父の心を見て真実を測るのにな。しかたなく
俺は家に帰つて準備をすることにした。はあ、この家ともお別れか
……いや、絶対に帰ってくる！

「出発は明日だからな。」

ええ！ はやつ。名残惜しむ時間も与えないのか。

その日は準備だけで終わった。夜。なかなか寝付けない。興奮と悲
しみ、期待が頭のなかで渦巻いている。親父達はとなりの部屋でぐ
っすり眠っている。嫌がらせかと思わず疑いたくなる。こついうと
きは……外にでて星でも眺めるか。

うつつ。寒いな。お、星がきれいだなあ。その星と一緒に月も目に入

る……。

あああああつ！　そういえば今日は満月だ。やばい、最近忙しかつたから忘れてた。満月といえば……魔物だ！

親父は魔物退治には出ないからすっかりわすれてた。魔術師の癖に！　参加しろよ！　そういえば隠居って言ってたな。目立つのもだめなのか。メディアス！　役立たずめ！　退治参加しろよ。でもいまさら起こす時間はない。

家で準備をしていると、扉をノックする音が聞こえてきた。そして開ける前にエレンが入ってきた。息遣いが荒い。急いでたんだな。こんなときに急ぐというとあれしかないだろう……。

「ヴィルアス、魔物が！　魔法使えるんでしょ？」
そうだった。行かないと！

「どこにでたんだ？」

「集会所の前に」

「行くぞ！」

ほっとした。数は十体くらいか。俺じゃなくても倒せるんじゃないか？　いや、難しいか。常人の大人では魔物なんて三対一くらいでも難しい。いま戦っているのは十三人。

「このままじゃ皆まで巻き込むな。皆、どいて！　魔法に巻き込まれても知らないからな」

魔法という言葉を恐れて疑いながらも村人は下がってくれた。魔物が追いかけてくる。

「精霊よ。私の進む道を阻まんとするものを裁き、我に龍の加護をあたえたまえ。ドラゴフレイ・スフィア」

魔方陣が現われ轟音とともに十匹の魔物が炎の光線に焼かれ燃える。魔法を初めて見た村人の顔は……なかなか見ものだな！

「おい、ヴィルアス、これ……どうしたんだよ」

まずいな。今の轟音で村の人たちまで起きたのか。というか、今俺

自分で自分を追い詰めている？ よし、ここは……逃げるが勝ち！
「悪いな。また今度話すよ！」
俺は全速力で走り出した。エレンも必死でついてくる。

家の前まで着くと俺は話を切り出した。

「エレン、明日、いや、今日今から俺は旅に出る。」

「え？ もう行っちゃうの？ マフラー……まだできてないんだけど」

「俺が帰ってきたら渡してくれよ」

俺は涙をこらえて必死に平然にみえるよう振舞う。ああ、泣きたくなるよ。

そうともしらず、エレンはついに泣き出した。しかも……俺に抱きついて。

「行かないで！ なんで行くの？」

エレンがこんなことを言うなんて、誰が予想できたことが。神すらも想像できなかったことだろう。

「俺だっけ行きたくて行くわけじゃないさ。でも……俺にどうにかできる問題じゃないんだって……。絶対あの忌々しいバロム倒して帰ってくるからさ」

エレンも必死に涙をこらえようとしている。

「でも！ ……ううん、やめとく。がんばってね。私も、がんばるから」

次の瞬間、信じられない出来事が起こった。涙を堪える俺の唇に涙を流す上目遣いのエレンが 唇を重ねた。触れるか、触れないかくらいの、そんな口付け。微かに感じる、エレンの優しさと温もり。こんなキスでも、甘い香りが漂ってくる。すぐに唇を離し、エレンは顔を真っ赤にして走り去っていった。

俺だって、顔は真っ赤になっているはずだ。唇に、微かな温かが残っている。微かな、しかし、確かに温かった。

なんだよ、あいつ。最近あいつらしくないな。

普段のあいつなら私も行く！ くらい言いそうなんだぞな。いや、俺に好意を持っていてるとかそういう意味じゃなくて、元気がいいという意味だけど。

なんだあれ？ もしかしてやっぱりエレンは俺に惚れているのか？

はは、んなわけないけどさ。しかし、今からでも追いかけてみたら……いや、そんなことあるわけ無いじゃないか。はあ。でも、もしかしたら……ああ！ 俺はもう行くなって決めたんだから。何で俺の決心はこんなに揺らぐんだろ。やめろよ、俺。

「どうした、ヴィルアス。涙で目が潤んでおるぞ」

家からわざとらしく知らないような口ぶりで出てくる。このくそ親父！ またしても全部見てやがったか。

「おい、今すぐ出発しようぜ。で、どこに行くんだ？」

「分かっておるわ。行き先は、波動帝国。隣国だ。そのために途中でいくつか町を通るがな。」

メディアス行くぞ。それより……よかったじゃないか」

やっぱり覗いてたか。悪趣味め。

俺は、仕方が無いまままで暮らしてきた村を後にした。ああ、俺の日常……。

てな分けた。まあ、殆ど無理やりだな、これは。抵抗する術すらない。どうやら親父は大魔術師らしいからな。

第三話（後書き）

よろしければ感想・批評を御願いたします。

第四話（前書き）

遅れてしまいました

第四話

それにしも、旅がこんなに暇なものだとは思わなかった。もっと魔物倒したりお宝手に入れたり……。俺は我慢できなくて聞いてみた。

「おい、もっと面白いことないのか？ 暇で暇で死にそうなんだ」

「……お前、まだ半日しか経ってないぞ」

「でもそれだけあつたら魔物くらい出てくるだろ」

「ああ、でてくるぞ。いろいろと。たとえば、ケンタウロス、オーガ、キマイラ、サイクロプス。まだまだいるぞ。あの山を通っていけば会えるぞ。どうする？ 道を変更するか？」

親父が微笑している。親父に屈するわけにはいかないよな。

「いくいく。あ、でもその前にもっと魔法の使い方教えてくれないか？」

あれ？ 親父はまだ笑っている。はっ。選択を間違えた！

親父は魔物を見ておびえる俺の顔を見たがってるんだ。さすがの俺もキマイラやサイクロプスやオーガなんて見たことないからな。

「では、今夜、魔法について教えてやるよ。明日からその山から近道しようか。そうだ、その前に町に寄らないとな。メディアス、あとどれくらいで町につく？」

メディアスは地図を見ながら答える。

「あと……二日くらいですね。」

ええ！ あと二日？ おそろしく暇だな。

「歩きながらも魔法の練習したりできないのか？」

「はあ。お前は基礎知識もないのか……」

おいおい、俺を育てたのはお前だろ！ 余計な知識は俺に押し付けたくせに！

「メディアス、この馬鹿に魔法つてものを教えてやってくれ。」

「はい。では、ヴィルアスさん。そもそも魔法とは……よって……」
その日、メディアスは語り続けた。意味が分からない。本当に俺は

魔法なんて使えるのか？

俺はメディアスに「魔法入門」という恐ろしいほど長くて見るだけで拒絶反応が出そうな本をかしてもらった。

「これ、俺が読むのか……？」

「魔法使いへの第一歩だな。あとは、剣もつかえないとだめじゃな。剣でも買いにいくか」

剣か。かつこいいかもれない。でも……。

「そんなに金があるのか？」

「やれやれ。我々の旅のお供はだれだ？」

「……そうか！ 王子様がいたんだ。」

俺はあまりに非現実的なことなので忘れていた。ごめんよ、メディアス！

「おい、結局街に行くまで暇じゃないか！ どうするんだよ！」

「昼は体力づくり、夜は読書」

「体力づくりって……何するんだよ。とういうか、本当にこれを読むのか？」

俺は字が読めることを恨むという貴重な体験をした。

親父がわざとらしくため息をつく。

「はあ。じゃあ魔術師になれないじゃないか。まったく。すぐに投げ出す奴だ」

ああ、鬱陶しい！ 俺のなかの鬱陶しいランキングベスト三に入るんじゃないか？ ついでに言うと、一位は国を悪くした、勝手な戦争で国を巻き込んだという理由でバロム、二位は元国王、ウィリアムだ。自分だけ逃げたし、戦争で負けるし。なんだか、嫌いだ。この二人は兄弟で見事にランクインしている。血族ってやつか？ だったらメディアスにもそういう一面があるのかな。

「お前今わしのことを鬱陶しいと思ってるだろ。この王子様にきさまの過去の出来事すべて暴露するぞ。いいのか？」

なっ！ それは……殆ど極刑に近いぞ。

「わかったわかった。やればいいんだろ！」

「いえ、ダクト様、聞かせてください。興味があります」

「おい！ メディアス！」

「ほう。興味があるか。いいだろう。何歳くらいが一番いいか。ん
」

「やめる、親父！ いえ、ダクト様、やめてください。どうかこの
純粹で健全な少年の恥をさらさないでください。お願いします」

「なんで俺がこんなこと言わなきゃならないんだ？ 馬鹿らしい。」

「ほう、馬鹿らしいだと？ いいだろう。その馬鹿らしい話、すべ
て暴露してやる」

「こいつ、また人の心を読んだのか？」

「や、やめるー！」

その後、この俺の恥ずかしい過去を大魔術師ダクトはすべて吐いて
しまった。この俺の精一杯の妨害を魔法で退けて。間違いだ。こん
な奴が大魔術師だなんて、なにかのまちがいだ！ 魔術師はこんな
こと絶対にしないよな？

このくそ親父は、俺が小さいころエレンに告白したこと、エレンと
喧嘩したときにエレンに俺の大事なところを思いつきり引っ張られ
たこと、その他諸々すべて洗いざらいぶちまけた。

「ははははは。無邪気な少年だったんですね。ははははは」

「てめえ、メディアス！ やはりそういう奴だったのか！ よし、き
めた。お前をランキングベスト5に任命する。」

そんな感じで夜になった。はあ、最初から気が重いなあ……。

俺たちは山のふもとにテントをはった。隣に川もあり便利そうだ。
夕食の後には俺の読書タイムの始まりだ。いや、間違えた。睡眠タ
イムだ。絶対、そうしてやる。親父にはなにかあっても屈しない。
簡易な晩御飯のあと、俺は……ニヤニヤした親父とメディアスとい
う優秀で教えるのが下手な魔術師の付きっ切りで五時間本を読み続
けた。

途中で寝ることは……不可能だ。一度でも魔術師から寝ている無防

第四話（後書き）

感想・批評御願いたします。

第五話（前書き）

遅れました。申し訳御座いません。

第五話

体長三メートル。ドラゴン様な顔に鬣がついていて四本の足で立っている。体は茶色、鬣の後ろ辺りから黒い翼が生えている。魔法を使うことができ、手足の爪は鋭く瞬発力も高い。移動能力に優れていてハンターのような存在（魔法大全参照）。

あいつにかかったら俺など瞬殺だろう。
「親父、メディアス、魔法で倒してくれよ。はやくつ。大魔術師なんだろ？」

メディアスが必死で走りながら叫ぶ。

「私たちは、寝不足で魔力が足りないんです。魔力が回復するのは寝ているときだから」

後ろに親父もついてきている。ほら、やっぱり寝不足はいけないんだ！

キマイラが飛び立った。空に浮かぶあの姿は悪魔と呼ぶに相応しい。次の瞬間、親父にキマイラが飛び掛った。

グシャツ。

不快な音がして、目をそむけた。酷い、親父が、親父が……おい、うそだよな。おい、親父、大魔術師なんだろ？ こんなところで死ぬなよ。

親父は動かない。首と別々になった体が転がっている。

「うわ。親父。！」

俺は思わず叫んだ。目に涙がたまっただが見れない。親父が、親父が。目の前で殺された。俺を育ててくれた親父が。

「メディアス」

目をこすって後ろを向くと、メディアスの死体も転がっていた。腹を何かが貫通した後があり、足が片方ちぎられている。キマイラは再び目標を定めて飛び掛ろうとした。

その瞬間、俺の頭の中の何かがぶち切れる。

安心して力がはいらぬ。本当なら感動のシーンってところか。親父達と再現するとそうもいかないらしいが。

「エレ　　ン、か。はっはっはっは」

親父がからかうように言う。ありえない。なあ、こんな父親、ありえないよな？

「おい、デラーノ！　いや、ダクト！　死んだんじゃなかったのか！」

「未熟者め。あれは幻影だ。わしが作り出したな。それにしても……はっはっはっはっは」

親父は感動の涙ではなく笑いすぎて死にそうだ、という涙を流している。メディアスと一緒に。

俺は涙が出なくなってくると今度は顔が赤面してきた。どうしよう。取り返しがつかないな。俺、俺、親父の目の前で……。ああ。もはや生き地獄だ。でも、生きてて良かった。

「親父、そろそろ笑うのやめろよ、怒るぞ」

親父は笑い続ける。そろそろ力が戻ってきた。よし。死ね！　親父！

「ドラゴ・フレア・スフィア！」

沈黙。とても、冷たい沈黙。

……あれ？　不発？　そうか。俺はさっき本気で魔法を撃つたんだ。もう今日は魔法は使えないんだろうな。

第五話（後書き）

感想・批評御願いします。

第六話（前書き）

すこし展開を考えていましたが考え終わりました。

第六話

やっと笑い声が止んだ。

「じゃあ、そろそろ出発するか。行くぞ、ウイルス」

ふう。やっとやめたか。こんな感じだからかわれるより出発したほうがいい。

「じゃあウイルス、早速筋トレな。腹筋四十回してから走って追いかけてこい。追いついたらまた腹筋な。メディアス、行くぞ」

「はい。じゃあウイルス、がんばれよ」

おいおい、二人とも、俺には二人の生の安息すら与えてくれないのか？ 勝手に村から連れ出して心のアフターケアはないのか？

一日中腹筋四十回とダツシュ繰り返すのか？ ありえないね。その間にも彼らとの距離は開いていくんだからやるしかない。この世の中、理不尽極まりないな。

親父が、俺を睨んだ。

「わかった、わかったよ。すればいいんだろ」

第二章

夜、俺は筋肉痛で動けなかった。結局朝食、昼食以外休めなかったからな。

いくら村で狩や農業など過酷な試練をこなしてきたからって……これは無理だ。明日早くつくことを祈るのみ。夕食なんて疲れすぎたから食べてない。しかし、この鬼教師は読書は休ませてくれない。

そして朝。読書と筋肉痛と親父達の毒舌による精神攻撃によって俺は気絶寸前だった。

よくがんばった。親父の過酷な労働に一日耐えた俺の行為は表彰に値する。はずだ。

「ライトニング！」

俺の上から雷が唸りを上げて落ちてきた。何故？

「さぼるな！」

おっと、本読みを疎かにしていたようだな。

「親父、攻撃呪文しか知らないのか？ こんなに憔悴している少年に雷を落とすのか？」

「ああ、わしは回復呪文はできん。あれは別格だ。魔術師とは別の才能がいる」

言い訳か。

「私ができますよ。ホーリー・ケア」

俺の体全体を包むような暖かい光。おお！ 疲れが取れた！ 少しだけ。

「悪いですが私の回復魔法は微力しか効果がなくてね。我慢してくださいね」

メディアスがニヤつきながら言う。

なんだろう、この気持ちは。回復してくれた人に対して怒りがこみ上げてくる。

「本当にこれしか効果がないんだな？」

「はい」

おいおい、本当か。これじゃあ気休め程度じゃないか。ま、王子様に対してこんな態度は失礼だな。満足げな顔をしておこつ。

「そうか、ありがとうな」

心の中でおもったことは……実際、攻撃魔法しかできないのか、こいつも。といった非難である。それを親父が楽しそうに見つめて……親父はたしか俺の心を読めるよな。この状況ってやばいのか？

俺は心の中でちゃんと親父に謝った。丁寧にと下座して。

さてさて、今日もつらい一日が始まった。町への長い道のり。ああ、憂鬱だ！ 来るんじゃないかった……と思いつつも無理やりだし、仕方ないかと瞬時にあきらめてしまふ。ああ、俺って根気ないな……。

さあ到着。今何時か教えてやろう。まあ、聞いてくれ。十八時。これをどう思う？ 重労働だ。俺は今多分HP表示したらあと一くらいしか残っていないだろう。

今の俺の状況とは、なんて言うまでもあるまい。分かるだろ？ さあ、俺の今の状況を思い浮かべて同情をしてくれ。

まあそんな状況も始めて見た街の風景のおかげで心なしか楽になった。初めて街に来た感想はと言うと……。

「なんだよ、これ」

これが精一杯だ。街の門を見ただけでこれである。街全体を巨大な壁で囲ってあり、そこにあつた門は俺から見ればすごい存在だった。威圧されてしまふ。中に入ってみるとまたすごい。ぼんやりと空が赤く染まり始めた頃から火の灯つたガス灯。ちゃんと整理された道路。歩いている人々は皆服装がちゃんとしている。中には馬に乗って歩いていたり馬車に乗っていたり。家もレンガ造りである。その都市の中央部には巨大な城が俺たちを見下ろすように立てられている。村育ちの俺としてはびっくりだ。未知の世界である。街全体が輝いているような、そんな雰囲気だ。活気がないのが気がかりだがでもそんなことより……。

「先に宿屋行こうぜ。もう疲れた……」

「急ぎの旅だからな。夜にはこの街をでる。あ、馬も買ったかったのだが」

二時間後。

この状況っておかしいよな？

親父達の買った食料類の二分の一くらいは俺が持っている。この国には奴隷制度があつたのか？

いや、あるな。バロムが王になってからできた。くそつたれ！ いや、親父じゃなくてバロムが。おい親父、睨むな。

「さあ、武器屋だ」

おおおおおお。これが俺の最初の感想。か、かつこいい。大剣に短刀、斧、槍、弓、その他いろいろ。男たるもの武器にあこがれないでどうする！

俺が目を宝石のごとく光らせて品定めしていたとき、親父が一振りの大剣に目をつけた。

「これは……城にあつた魔法剣……ドラグ・ブレイドか？ ……」

魔法剣？ それはすごい代物だな。なんとなく言葉の響きが。実際、どんな剣なんだろう。ま、魔法がかかっているんだろうな。流石城の剣……ってなんでこの店にそんなものがあるんだよ。

店の奥から声が響いてきた。

「お目が高いですね。しかし、それは売り物ではありませんよ」

「これを買いたいんだが、お前はこれをどこで手に入れたんだ？」

奥から出てきた主人は、質問してきた人の顔を見て驚愕する。

「ダ、ダダダダ、ダクト様？」

噛み過ぎだ。何でそんなに驚く……有名人だからか？

「何故知っている。ふむ、メディアス、この店から去ろう。早くこの町から出たほうが良い」

「メメメ、メディアス様？」

「お前、何者だ！」

ついに親父が怒鳴った。脅迫まがいの、いや、脅迫か。

「忘れてしまわれたのですか。家臣のエドでございます」

「な、何？ エドだったのか。よく世話になった。何故こんなところ？」

なんだか話が勝手に進んでいく。

「王様が倒れていなくなつたときに行き場がなくなつて……親の家

業を継ぐことにしたんです。そのときに城に飾ってあった剣の事を思い出しまして。持っていていこうかと」

「王はまだ生きてるぞ」

「ええ、そうなんですか？ よかった、よかった……今はどうしてるんです？」

おいおい、喜ぶことなのか？ さっさと死んじまえ、くそ国王。」
つん！ 親父に殴られた。

「それが……呪いのせいであと一ヶ月の命に……くそっ」
へっ。あと一ヶ月か。待ち遠しいぜ。あ、いや、うそですよ。親父が魔法を唱えかけていたので訂正した。

「一ヶ月ですか……会いに行きたいところですが……」

「エドの気持ちだけでも伝えておこう」
一呼吸おいてエドが言う。

「当然ですが貴方から代金を受け取るわけにはいきません。どうぞ持っていてください」

ただ？ すばらしい！

「ところで……そちらの少年は誰ですか？」

「え？ ダクトさんの息子の」

「ヴィルアスじゃよ」

メディアスの答えをさえぎって親父が言った。それは答えになってないんじゃないか？

「そうですか、この方が……」

おい、俺はただの村育ちの平民だぞ。

「それより、早くこの町を出たほうがいいですよ。この町では……」

「ああ、わかってる、いくぞ。エド、今回も世話になったな。また会おう」

「はい。王様にもお伝えください」

なんでこの町は早く出ないとだめなんだ？ 謎が増えていく。あー、うっとうしい！

というところで、俺たちは店をあとにした。

エドの忠告どおり俺たちはまっすぐに町の出口へ向かう。でも、こんな大都市の祭りなのに俺たちの村の祭りのほうが活気に満ちている。不思議だ……。

「親父、何でこの町はこんなに活気が無いんだ？」

「ん？ この町は特に税が重いからな。徴兵もある。わしらの村が平和すぎたのじゃよ」

「そうなのか……。」

でも、店はこっちのほうが多そうだな。あ、フランクフルトだ。お、あっちにはくじ引きもある。そうやって数多くある店をきよるきよると眺めているとその中で人だかりがあるのに全然騒いでいない店があった。しかも、客は全員大人、しかも貴族のような服を着ているものばかりという不思議な店である。周りの店を見てみるがやはりそんな店は他にない。怪しい……興味を引かれ俺はその方向を向く。しかし、店の回りには人が群れており全く見えない。

「親父、ちょっと待って。あの店を見てくる」

「やめとけ、あれは見るべきじゃない」

親父はそんな忠告をする。そんなに俺の楽しみを奪いたいのか？

わくわくしながら人をかき分けて中心に入っていく……え？ な、

何だ？ 俺は目を疑った。一際目立つその店の正体、それは……：奴隷商業。

最低最悪の職業。

商人が手をこまねきながら人を売りさばっている。

周りでは嫌悪を感じる人、品定めする人がいる。

憤怒の感情。

思わず殴りかかりそうになった。いつの間にか後ろにいた親父が俺の気持ちを察したようだ。

「おい、ヴィルアス、騒ぎは起こすなよ」

だめだめ。残念だけどそんなことじゃ俺は止まらない。拳を握り締

め駆け出す。

「ラン・スレイド・バルス」

親父が小声で叫ぶ。うつ、動けない。よく見ると足に影が絡み付いている。なるほどね。動きを奪う魔法ですか。くそ親父め。なんで奴隷商人をかばうんだ。しょうがないから口走る。

「ドラゴフレイ・スファイア」

町の人の声の中をかき消すような轟音が響く。

はっ、し、しまった！ 俺は、俺は……人殺しを……俺は、俺は。どうしよう。俺は、人を、人を殺して……。奴隷商人は黒こげになつて倒れている。お、俺。

「安心しろ。まだ死んでない。まあ今はそんなことが問題ではないがな」

よかった。まだ死んでないのか。しかし、確かにそんなことは問題ではないだろう。今の轟音で町の人々の注意は俺たちに向かっている。いままで騒がしかったここら辺一体が普段の静けさを取り戻している。俺たちは一際目立っているだろう。祭りの中でいきなり何か轟音を立てて爆発したとき、びっくりしない人間などいるだろうか？ 人々は再び騒ぎ出した。しかし、歓喜の声ではない。

恐怖の叫びである。皆一斉に駆け出し、広場を去っていく。特に貴族達の反応など見ものだ。普段偉そうにしているイメージがある分、その顔は俺をざまあ見ろ、という感情にさせる。もちろん、俺が起こしてしまった騒ぎを後悔してないわけじゃない。だって、俺って犯罪者の仲間入りだろ？ その証拠に警察が駆け寄ってくる。それもすごい人数だ。何人いるかな？ 祭りの時は警察の巡回が多いだろう。多分、三十人以上いる。つかまったら、俺は牢獄行き。村には戻れなくなる。村には俺を待っている妻が……いや、冗談だよ。親父、睨むな。どうせ今のも読んだんだろ。しかし、思春期の男子にはそれくらいの理想があつて当たり前。その俺の神聖な区域に土足で踏み込むとは何事だ！

俺の勝手な叫びを、妄想をとめるように親父が叫ぶ。

「にげる！」

「そうだ、にげるんだ。そのとき、警察官の一人が俺たちの方を指差して大声で叫んだ。」

「おい、あれ、もしかして大犯罪者のメディアスじゃないか？ 元国王の子どもの。反逆者じゃないか。あいつも捕まえるー！」

「なっ、くそっ！ いつだってそうだ。政府はいくらあくどい人間が王でも金さえあれば言いなりになる。自分の考えを持たない。メディアスが何したんだよ！ まあ、あの人をからかう姿勢ならば親父とメディアスはたしかに犯罪に属するかもしれない。まあ、それはおいといて、悪いのはバロムだろ！ いや、ウィリアムをかばうつもりはないけどさ。バロムのことを考えると。自分が王になれないからって反乱起こしたくせに防衛戦をしたメディアスたちが反逆者？ 笑わせてくれる。どっちが反逆者だよ。」

「親父、魔法使えよ！」

親父がうなずいて叫ぶ。

「ラン・スレイド・バルス」

警察の動きが止まった。約三名を除いて。

特殊警察のようだ。他の警察と別の制服を着ている。しかも魔法が使えるらしい。なんせ親父の魔法を破ったんだからな。そのうえ……後ろからその制服を着たやつらがぞろぞろと来る。うわっ、すごいな……その光景を見てため息をついて親父が言う。

「メディアス、ヴィルアス、手を前にかざしてこう叫べ。『龍の力

流星のごとき炎 燃え盛る大地 ファルステロー・スファイア！』」

目の前の兵士達に隕石のような炎が降り注ぐ。一個の隕石は大体直径一メートルくらいかな。そこから五十センチほど青色の炎が隕石を包んで兵士達に降り注いでいく。俺の語彙ではこんな表現しかできないが青色の流れ星を間近で見ているようだ。夜空に青い大量の流れ星。きれいな光景だねえ。じゃなくて、殺人じゃないか！ いくら自分のためでも殺人は……。でもやらないと自分の命が……。そうだ、バロムなんてどうせ重い税をかけて嫌われているんだ！

その兵士を殺したって俺たちを恨んだりしないさ！ でも……人殺しは……。俺は生き残るためなら何をしてもいい。こういつてたことがあったな。甘かった。俺には人を殺す覚悟なんてないんだな。メディアスは叫ぶ。

「龍の力 流星のごとき炎 燃え盛る大地 ファルステーク・スフィア！」

特殊部隊もこれだけ攻撃されれば死んでしまうじゃないか！ 放ったメディアスでさえ反動で吹っ飛ばされ、壁にぶつかり起き上がるうとするが動けない。強力な魔法を放ったとき以外、ね。こういうことか。

うわっ。警察生きてるじゃないか。何者だよ。いや、警察はちゃんと俺たちの術を受けてこげ焦げになって死体のように横たわっている。そこで俺たちを睨んでいるのは……軍隊だ！

第六話（後書き）

感想・批評お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5105b/>

俺の見た世界 幻影帝国

2010年11月5日14時02分発行